『古代アメリカ』 9, 2006 pp. 25-53

＜論文＞

メキシコ、テオティワカンの放血儀礼
－考古遺物の分析から－

大野裕子

【要旨】

本研究の目的は、テオティワカンの都市中心部にある主要モニュメント「羽毛の生えた蛇神殿」と「月のピラミッド」から出土した副葬品のうち、黒曜石製穿孔具を分析することで、メソアメリカの各地域で報告されている放血儀礼のテオティワカンにおける存在を検討するものである。またその議論を通して、テオティワカンの王族や貴族階級の支配イデオロギーを考察する。分析の結果は、放血儀礼がテオティワカンにも存在した可能性、さらに、テオティワカンの支配者が放血用穿孔具の生産をコントロールしていた可能性を示唆している。本研究は、放血儀礼研究が交易、図像、宗教観などの解釈、さらに王族や貴族階級の支配イデオロギー解釈に貢献しうる分野であることを示している。

【キーワード】

テオティワカン、放血儀礼、黒曜石製品、穿孔具、支配者、イデオロギー

Teotihuacan, bloodletting, obsidian products, perforators, elite, ideology

【目次】

1. はじめに
2. テオティワカンの発掘調査
3. テオティワカンにおける放血用穿孔具の考古学事例
3-1. 黒曜石
3-2. その他の放血用穿孔具（「緑石」〈ヒスイ等〉、骨角器、植物のトゲなど）
4. 分析
4-1. 黒曜石製品からみるテオティワカンにおける放血儀礼
4-2. その他の穿孔具からみるテオティワカンにおける放血儀礼
5. 考察
5-1. 実用品と象徴品について
5-2. 放血用穿孔具の生産コントロールと支配者
6. 結びに

1. はじめに

放血儀礼とは、自らの身体に傷をつけ、あるいは穴を開け、血を放つ行為をいう。生贄と異なり、放血儀礼は自分自身で血を流し神や祖先に捧げる行為であり、通常死を伴わない。命を捧げるのではなく、血を捧げる、あるいは血を流す行為自体に意味を与えていた。

王族や貴族階級によって行われた放血儀礼あるいは放血を伴う儀礼は特に、土器や石彫などに図像や文字として記録され、多くの事例がメソアメリカの各地域から報告されている[Barba et.al. 1998: 20-27; Brady et.al. 1986: 18-25; Colas et.al. 2000: 3-10; Davletshin 2003; Joyce et.al. 1991; Pascual 2001: 291-324; Schele 1984: 7-48; Schele and Miller 1986; Wilkerson 1984: 101-132]。これらの報告から、王族や貴族階級による放血儀礼は、その都市の重要な宗教儀礼の一つであり、多くの人々や組織をコントロールする儀礼であったことがわかる。

メソアメリカの各地域では、王族や貴族階級の支配イデオロギーと放血儀礼は緊密に関連していたようであるが、テオティワカン（Teotihuacan）（図 1）の放血儀礼についての研究は非常に少なく、それがテオティワカンに存在したのか、存在したならば誰が何の目的で行っていたのかは明らかになっていない。本研究の目的は、発掘された遺物の分析を通してテオティワカンに放血儀礼はあったのかどうかを検討することである。さらに、放血儀礼に関する議論を通して、テオティワカンの王族や貴族階級の支配イデオロギーを考察する。大都市テオティワカンとメソアメリカの各地域との交流が指摘されつつある中で、テオティワカン社会における放血儀礼の研究は、テオティワカン研究のみならずメソアメリカ研究においても必要であると思われる。

テオティワカンの都市中心部、あるいはそれに隣接する住居址から、盗掘品を含め、壁画資料の存在が報告されており、テオティワカンの放血儀礼研究は、これまでこれらの図像資料の分析によるものだった[Cabrera 2001; C. Millon 1988; Taube 2000; Teresa 2001]。しかし、それらの壁画はマヤ地域で見られるような写実的な描画方法ではなく、抽象的な図像が用いられている場合が多く、さらに文字情報が欠如しているために解釈が困難である。現在まで多くの研究者により図像解釈が進められているが、その複雑な表現方法のため、未だ専門家の間でも意見の一致を見ない。そのため、図像資料から読み取ることのできる情報だけではなく、発掘調査による出土遺物を分析することが、テオティワカンにおける放血儀礼の解釈に有効な手段である。

2. テオティワカンの発掘調査

本研究で扱う考古資料は、メキシコ州サン・フアンにあるテオティワカン研究センターに保管されている遺物のうち、「羽毛の生えた蛇神殿（Feathered Serpent Pyramid: FSP）」と「月のピラミッド（The Pyramid of the Moon: MP）」の発掘調査によって出土した副葬品である。これらの建築物は、その規模や出土遺物の内容から、重要な儀式が行われた可能性の高い地区であると言える。そのため、本研究で扱う主要な分析対象とした。

テオティワカンの考古学調査は 19 世紀の終わりから本格的に始められ、「羽毛の生えた蛇神殿」（図 2）は、1917 年から 1922 年にガミオ［Gamio 1922］によって最初の発掘調査が行われた。

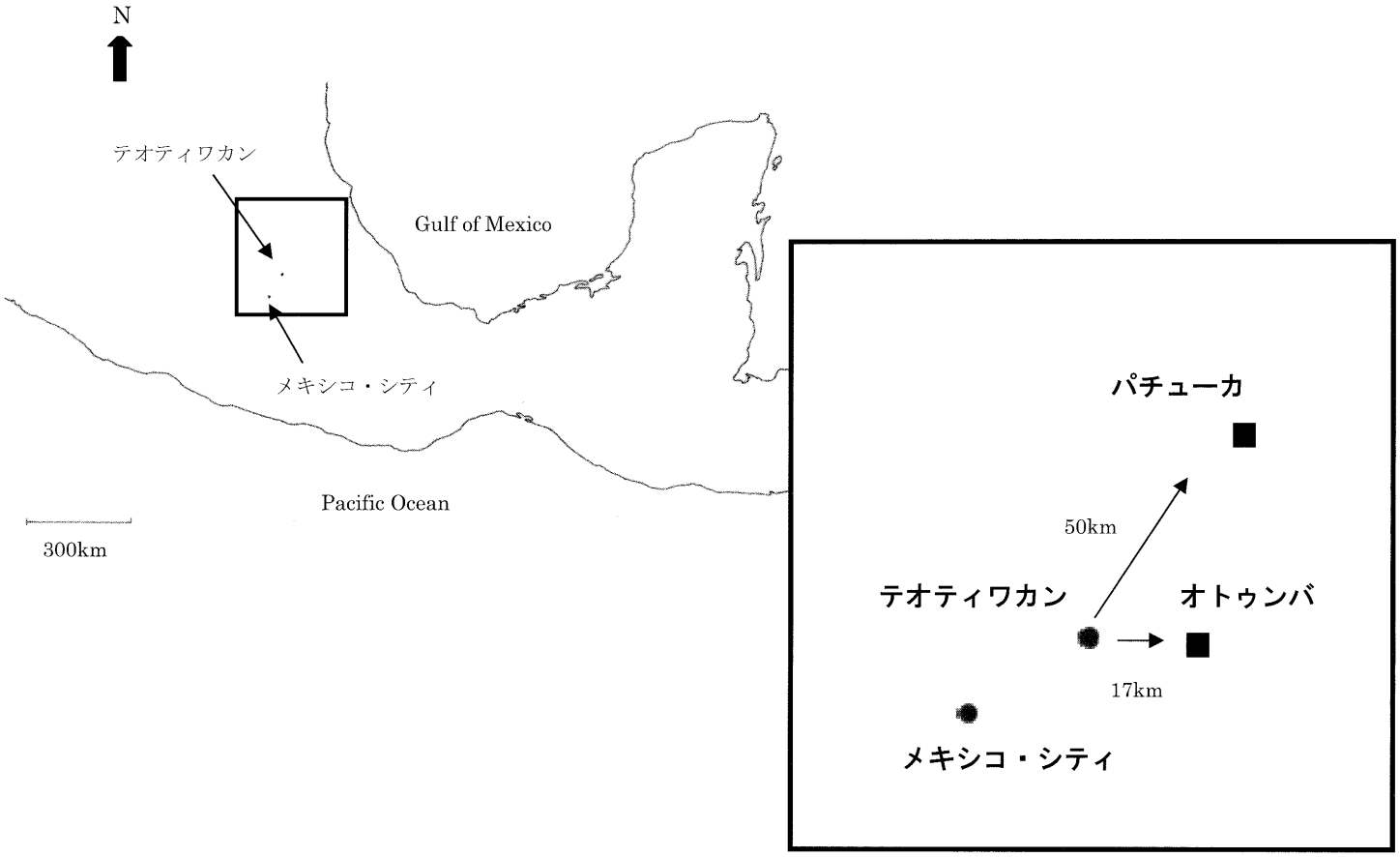


図１　テオティワカンと黒曜石の産地

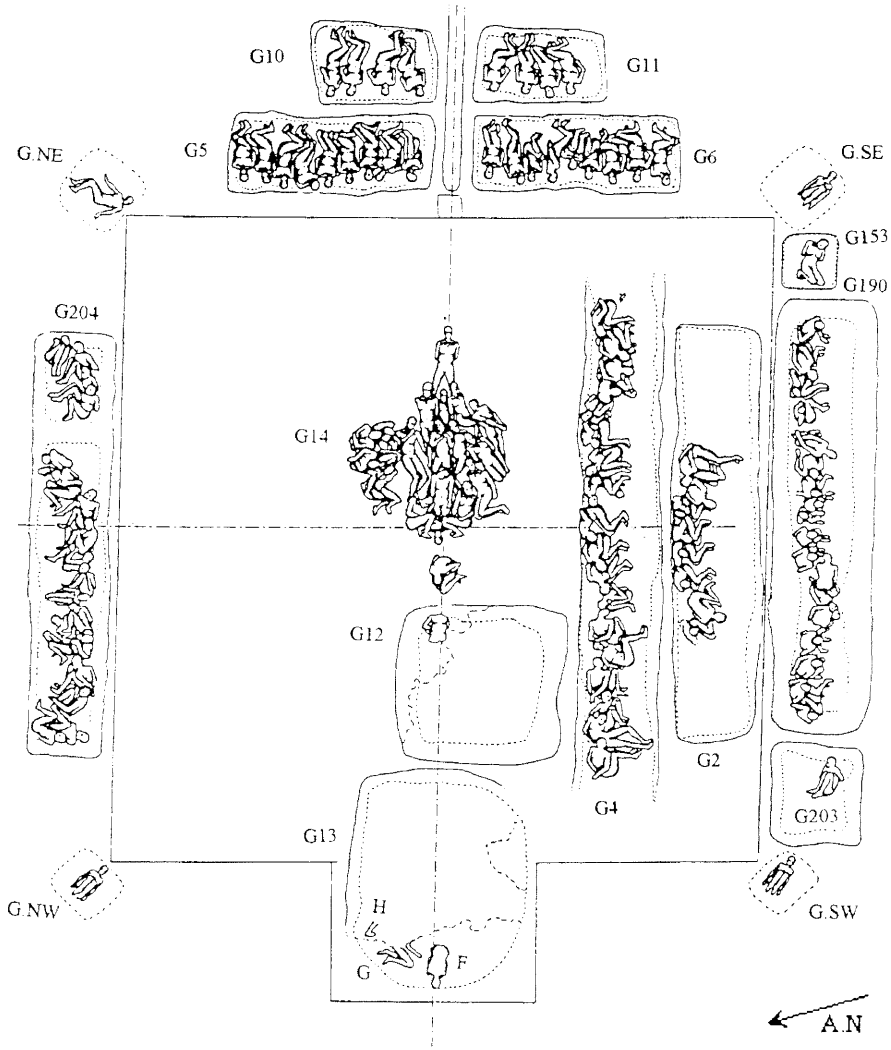


図 2　「羽毛の生えた蛇神殿」(Feathered Serpent Pyramid)

[Sugiyama 2005: 117 から引用]

1980 年から 1982 年の再調査により、20 体の大規模生贄埋葬群が見つかり、それを機に、「ケツァルコアトル神殿プロジェクト（Proyecto Templo de Quetzalcoatl 以下、PTQ）」が結成された［Cabrera, Sugiyama, and Cowgill 1991］。その結果、1988 年から 1989 年の発掘で、137 体の埋葬体と多くの副葬品を伴う 25 基の埋葬が発見された。これらの集団埋葬墓は、層位学的に全てピラミッド建立時に相当し、多くの埋葬体は、両手を後ろ手に縛られ背中で交差した状態で発見されたため、生贄とされた人々と解釈されている［Sugiyama 1992:210］。その中には多くの戦士が含まれていた。非常に豪華な副葬品を身につけた人々がいたことから、支配者が眠っていた可能性も指摘さ

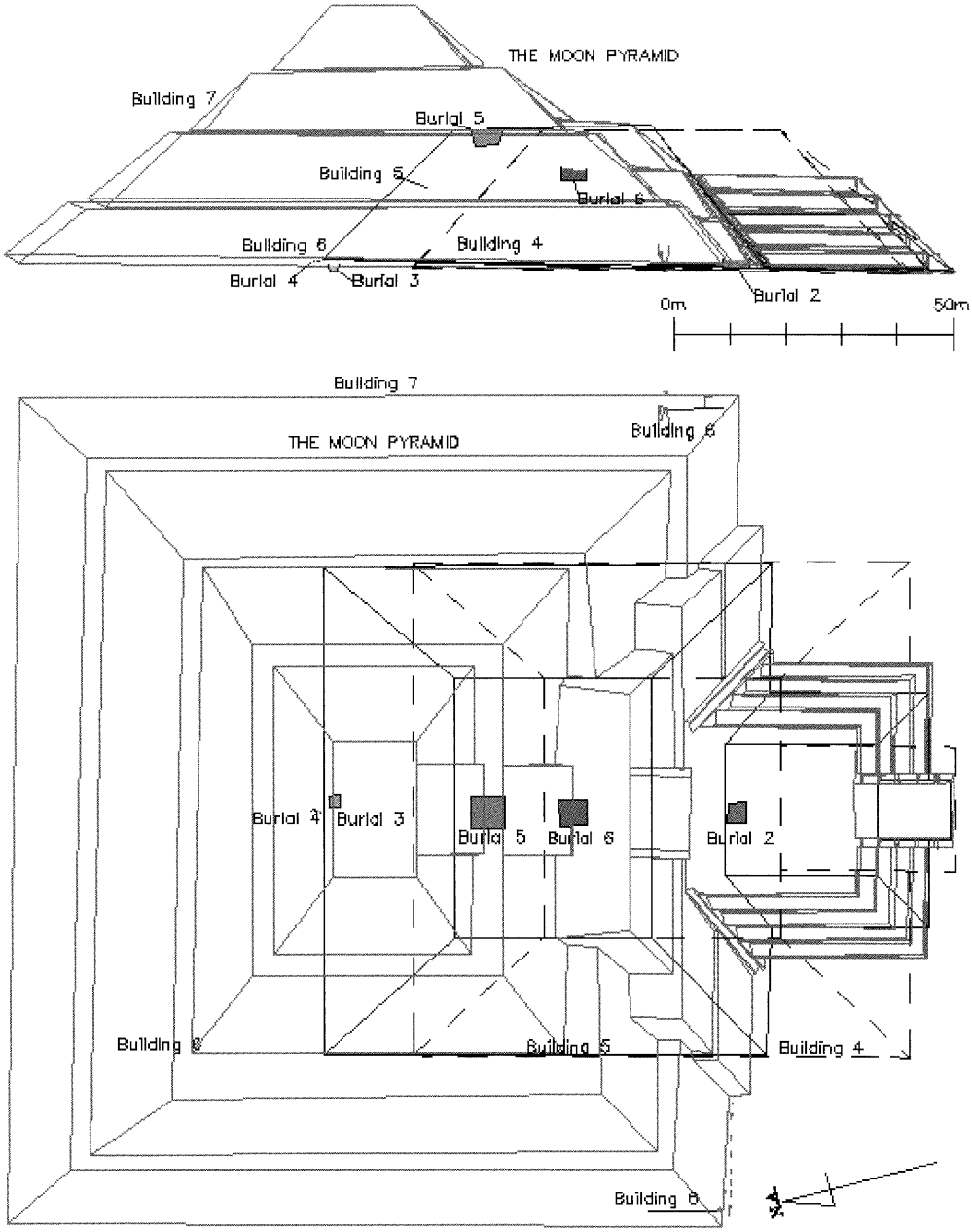


図３　「月のピラミッド」（The Moon Pyramid）（月のピラミッド・プロジェクト提供）

れているが、盗掘が激しいため十分な情報は得られていない。副葬品には、黒曜石製の槍先、人物像、「緑石[1)]」製の耳飾、鼻飾り、貝製の耳飾、ネックレス、人間の上顎を似せたネックレス、実際の人骨上顎ネックレス、黄鉄鉱、スレート板の鏡などが含まれていた。

「月のピラミッド」の本格的な内部調査は 1998 年に杉山三郎、ルベン・カブレラ共同団長によって始められた。この月のピラミッド・プロジェクト（Proyecto Pirámide de la Luna）により、「月のピラミッド」は、その内部に何層もの建造物があり、現在見られる大きさになるまでに 6 度増改築されていることが分かった。第一期のピラミッドは A.D.100 年頃の建築であると考えられている。さらに、内部からは様々な建築段階に伴う 5 基の埋葬が見つかっており、何らかの儀礼が行われたあとに埋葬されたと考えられている（図 3）。FSP で見られた生贄埋葬体と同じく、埋葬 4 や埋葬 5 を除く全ての埋葬体は、両手を後ろ手に縛られた状態で出土した。これらの埋葬には盗掘跡が見られず、多くの場合、埋葬体や動物体に加えて、様々な副葬品を伴っていたことが確認された。以下に、分析対象としたそれぞれの埋葬の特徴を記す。

FSP 埋葬 14（図 2）（A.D.200-250 頃）

ピラミッドの中心地域で発見された埋葬 14 からは、20 体の生贄埋葬体が複雑に重なり合って出土しており、そのほとんどは両手を後ろ手に縛られ背中で交差した状態で出土している [Sugiyama 2005:90]。FSP の他の埋葬と異なり、埋葬 14 は盗掘を免れたと考えられ、豪華な副葬品も多く発見された。「緑石」製品、黒曜石製品、貝製品、土器、動物体などが出土し、それらの配置に特に規則性は見られない。

MP 埋葬 2（図 4）（A.D.250 頃）

第四期ピラミッドの内部で南北の中心軸上に発見され、生贄にされたと思われる人間の埋葬一体と複数の動物体や副葬品が出土した［Sugiyama and Cabrera 1999］。土器、「緑石」製の耳飾、ビーズ、人物像、黒曜石製の槍先、ナイフ、石刃、人物像、貝製のビーズ、胸飾り、耳飾、人間の上顎のイミテーション、また黄鉄鉱の鏡や有機質製品の破片などが出土した。埋葬の中心には、黒曜石製の木の葉形ナイフと波形ナイフが放射状に配置され、多くの埋納品が重なり合っていた。これらの黒曜石製ナイフの上には黄鉄鉱の円盤が置かれ、さらにその上に「緑石」製の人形が置かれていた。人形の周りには貝製のビーズや人間の上顎のイミテーションが見られ、鏡の周りには槍先や石刃が放射状に置かれるなど、副葬品の配置には規則性が見られる。人間の埋葬体は座った状態で東の壁に接して発見され、手は後ろに重ね合わされており、「緑石」製ビーズ・耳飾をつけていた。

MP 埋葬 3（図 5）（A.D.300 頃）

第五期ピラミッドの中心軸近くから発見された。4 体の埋葬体（3-A・3-B・3-C・3-D）が見つかり［Sugiyama and Cabrera 2000］、埋葬体 3-A・3-B・3-C は仰向けで手は体の下にあり、3-D は横向きの姿勢で脚を曲げており、同じく手は背後に回っていた。手の辺りからヒモ状繊維の残骸が見られることから、手首を縛られていたようである。「緑石」製の鼻飾り、ビーズ、耳飾、貝製の耳飾、ビーズ、胸飾りなどがそれぞれの個体に伴って出土している。埋葬体 3-B・3-C の骨盤付近から「緑石」製の人物坐像、耳飾、ビーズ、様々な貝製品、黒曜石製のナイフ、人物像などの副葬品が

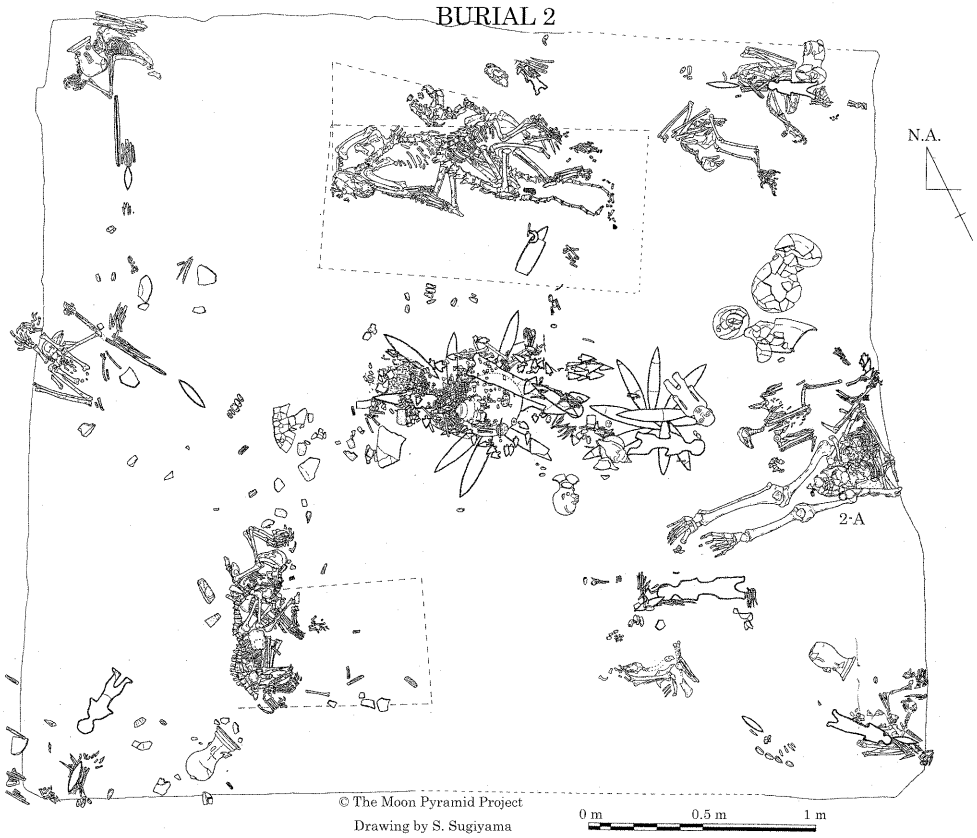


図 4　「月のピラミッド」埋葬 2　（月のピラミッド・プロジェクト提供）

それぞれセットで出土した。また、埋葬の四隅と北壁に接した箇所に大きな巻き貝が、埋葬の至る所にネコ科やイヌ科の動物の頭部のみ合計 18 体が、それぞれ出土した。さらに、黒曜石製の槍先、石刃、人物像、あるいは貝製品、黄鉄鉱の鏡、床に張り付いた有機質製品の破片などが見つかった。

MP 埋葬 5（図 6）（A.D.350 頃）

第五期のピラミッド頂上部を掘り込んだ形で発見され、副葬品と 3 体の埋葬体（5-A・5-B・5-C）が出土した［Sugiyama and Cabrera 2003］。多くの石刃が埋土の上層から出土したため、この空間を埋める途中で何らかの儀式が行われた可能性があると考えられている。巻き貝、黒曜石製の人物像、石刃、「緑石」製ビーズ、耳飾、貝製ビーズ、耳飾、石盤などの副葬品が出土した。これらの副葬品の一部は、埋葬の四隅や一定地域から集中して出土するなど、配置に規則性が見られる。埋葬 3 と同様に、ネコ科やイヌ科の動物も確認されている。埋葬体 5-A は、胡坐をかき、手は足の上に置かれ、「緑石」製胸飾りと耳飾をつけていた。埋葬体 5-B は 5-A と同様、胡坐をかき、手は足の上に置かれていた。装飾品も非常に良く似ており、「緑石」製の胸飾りと耳飾をつけていた。埋葬体 5-A・5-B の下には繊維物質も広がっており、何か有機質の物質の上に埋葬されていたようだ。

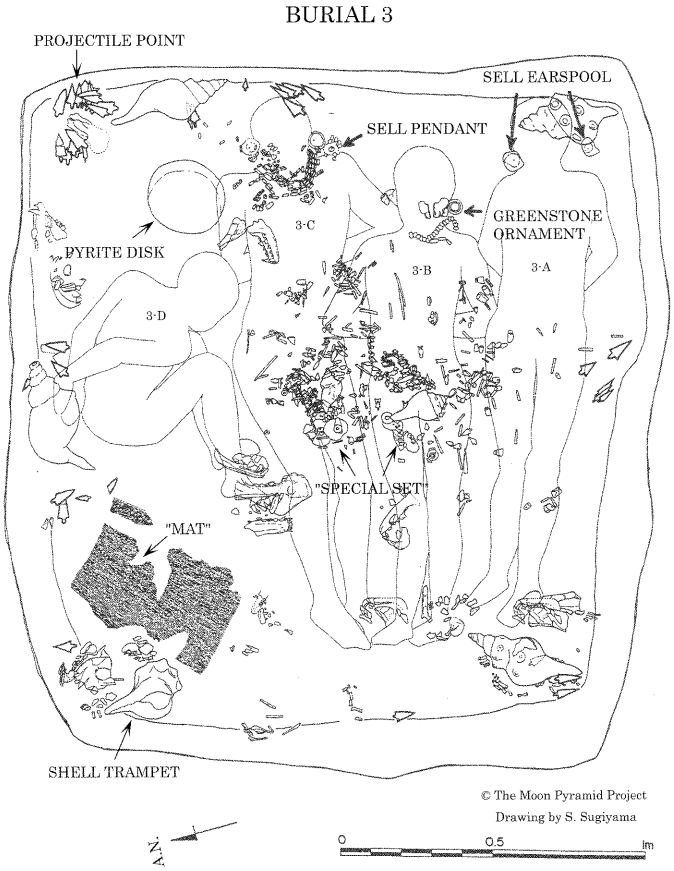


図 5「月のピラミッド」埋葬 3（月のピラミッド・プロジェクト提供）

埋葬体 5-C は、胡坐をかき、手を足の上に置いており、貝製の胸飾り、耳飾、「緑石」製の耳飾などが伴って出土した [Sugiyama and Lopéz 2006a, 2006b]。

MP 埋葬 6（A.D.300 頃）

第五期ピラミッドに伴うと考えられる埋葬 6 からは、12 体の埋葬体と多くの副葬品が出土した［Sugiyama and Cabrera 2005］。2 体は豪華な副葬品を身に着けていた。埋土内部中央から香炉台が見つかっており、埋葬の途中で何らかの儀礼が行われたと考えられる。動物体、有機質物質、貝製品、土器、黒曜石製品、「緑石」製品、黄鉄鉱製品などが埋葬体とともに出土した。東壁際には動物体と土器、黒曜石製品が発見され、北壁近くには副葬品が集中し、豪華な副葬品を身につけた 2 体の埋葬体も中央から少し北側に出土している。埋葬体 6-A は屈葬で、両腕が背中に回っていた。「緑石」製ビーズ、ペンダント、耳飾をつけ、黒曜石製の槍先や「緑石」製の針を伴っていた。埋

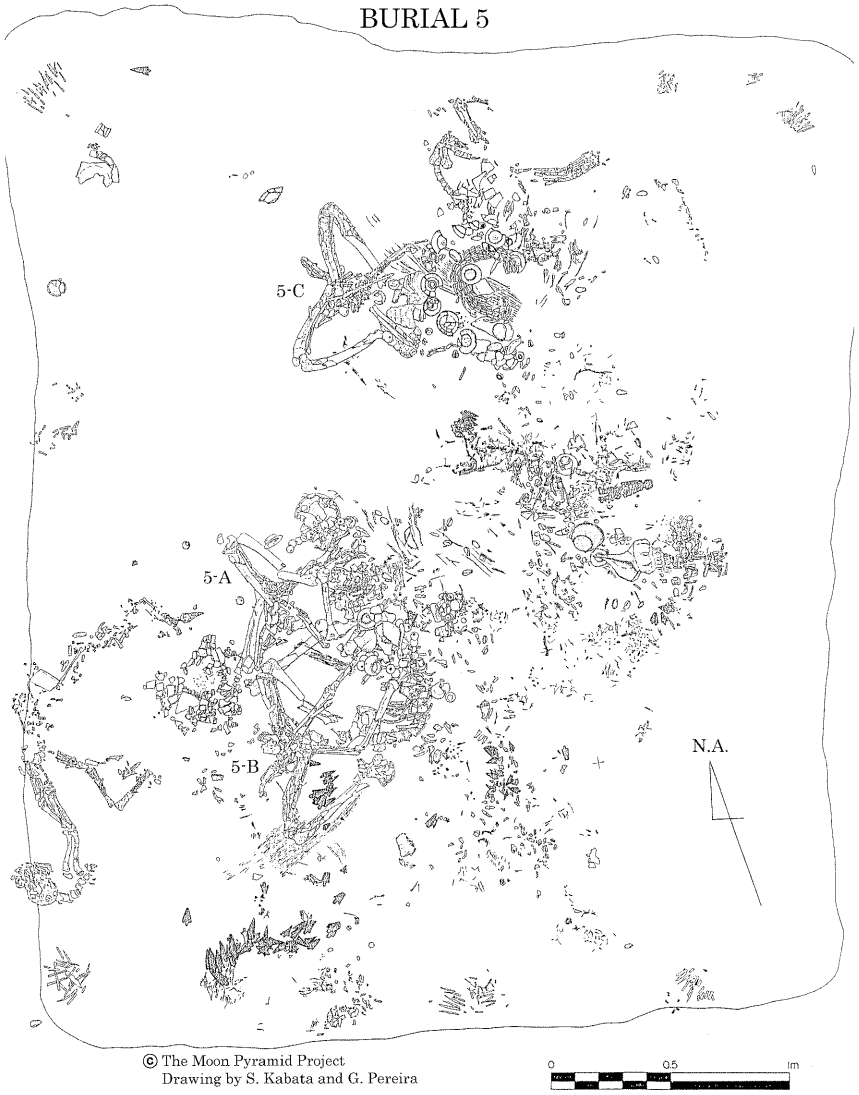


図 6 「月のピラミッド」埋葬 5（月のピラミッド・プロジェクト提供）

葬体 6-B も屈葬で、貝製のネックレスやその他の装飾品、土器、黒曜石製ナイフ、その他の黒曜石製品が多く伴っていた。中心から北よりには黒曜石製波形ナイフが 9 点と羽毛の生えた蛇像 9 点がセットで放射線状に配置してあった。その上に黄鉄鉱の鏡、黒曜石人物像、「緑石」製の人形が配置されていた。埋葬の中心には副葬品がなく、生贄用と思われるナイフが一点あるのみであった。また、ネコ科、イヌ科、鳥類の動物体が身体の一部のみの場合も含めて多数出土した。埋葬 6 の北西部に 10 体の頭部が欠けた埋葬体が集中して出土しており、すべて両腕が後ろで縛られている状態であった。埋葬体 6-A・6-B に比べて埋葬の配置に規則性がなく、副葬品も伴っていなかった。

これらの大型ピラミッドからの複数の埋葬の発見は、都市における宗教行事がこれらのピラミッ

ドで行われたことを示している。また、テオティワカンでは王墓が発見されていないが、多数の埋葬体、豪華な副葬品の数々から、都市をコントロールしていた支配者集団、あるいは組織が存在したと考えられる。そして、その多数の副葬品は、形態、配置において非常に計画的であり、それぞれの副葬品は、支配者と関係の深い資料であると思われる。

3．テオティワカンにおける放血用穿孔具の考古学事例

発掘された副葬品のうち、本研究では、黒曜石製品を分析する。これまでテオティワカンでは数々の発掘調査が実施されてきたが、放血用穿孔具に焦点を当てた遺物分析はわずかである[Parry 2001, 2002]。メソアメリカの他地域における放血儀礼研究によると、放血用穿孔具としての骨角器や黒曜石製品などが、埋葬体に伴って発見されている。テオティワカンの発掘調査においても、類似した形態の黒曜石製品が多くの埋葬体に同様のコンテクストで伴っているため、それらを放血用穿孔具の可能性があるものとして分析する。

分析にあたり、考古遺物の数量、サイズ、色、その他の形態的特徴などを記録した。記録した厖大な資料の中から特定の特徴を持つ資料を抽出し、それぞれの特徴を比較した。

3-1. 黒曜石

テオティワカンの近隣には大規模な黒曜石の原産地が確認されている（図１）。テオティワカンにとって主な採掘場であり、コントロールしていた産地の一つは、テオティワカンから東へ約 17 キロメートルのオトゥンバ（Otumba）である。テオティワカンで見られる灰色がかった黒曜石はそのほとんどがオトゥンバ産である。メカと呼ばれる赤色が混じった黒曜石がしばしばモニュメント内埋葬において出土するが、これらもオトゥンバ産であるといわれる。また、テオティワカンから北東へ約 50 キロメートルのところにパチューカ（Pachuca）もあり、この産地の黒曜石は緑色を特徴としている[Spence 1981,1983]。これらの産地を利用したテオティワカンには、数タイプの黒曜石製品の工房が多数存在したとの解釈もあり[2)] [Spence 1981:771]、黒曜石製品の生産が盛んだった[3)]ということが明らかになってきた[Carballo 2004; Pastrana 1998]。

黒曜石製品は、モニュメント建設に関連して埋葬された生贄体に伴って多数出土している。アパートメント式住居複合から発掘された多くの墓からもさまざまな種類の黒曜石製品が出土している[Manzanilla et.al. 1999; Parry 2002; Sempowski and Spence 1994; Storey and Widmer 1999]。つまり、黒曜石製品は日用品[4)]として以外に公共施設ならびに住居施設における埋葬の副葬品としても利用されていたのである。本研究でとりあげるモニュメント内の埋葬から出土した黒曜石製品は、いくつかの形態的特徴から分類することができる。

テオティワカンの埋葬から出土する黒曜石製品は、両面調整石器、石刃、槍先、また、人や蛇をかたどった形象製品などである。放血用穿孔具としては、針、あるいは錐状の道具[Clark 1986:70]や、先の尖った石刃などが用いられたと考えられている[5)] [Parry 2001]。槍先は、投槍の先端として使われた以外に、頭飾りなどの装飾品として使用されていた可能性も指摘されている[Parry 2002, C. Millon 1973:296]。人物形、動物形の黒曜石製品は、実用的な利器としては適していない。黒曜石が加工されることによる象徴的意味[6)]を重視した製品であったのだろう。したがって、その形態

的特徴から、両面調整石器と石刃（図 7）は放血用穿孔具として使用された可能性が考えられるため、本研究では両者を分析対象とする。

「羽毛の生えた蛇神殿：FSP」に関して、分析対象とする黒曜石製品は、副葬品が集中していた埋葬 14 からの出土遺物に限った。他の埋葬では、黒曜石製品（特に両面調整石器と石刃）の出土が極めて少なく、また盗掘が激しい埋葬もあり、それらからは量的な分析資料が抽出できないと判断したためである。「月のピラミッド：MP」から出土した埋葬 2,3,4,5,6 のうち、本研究に使用した資料は、埋葬 2,3,5,6 である。埋葬 4 は、頭蓋骨のみ 17 体が出土しており、副葬品は伴っていなかったからである。したがって、分析対象としたのは、5 基の埋葬から出土した 1,837 点の両面調整石器と石刃である。

図 7　左：石刃（「羽毛の生えた蛇神殿」埋葬 14 出土）
右：両面調整石器（「月のピラミッド」埋葬 6 出土）

(1) 両面調整ナイフ[7]（表 1）

両面調整石器は、いくつかのタイプに分類することができる。杉山[Sugiyama 2005:132-133]の分類によると、FSP 出土の両面調整石器は、A から F の 6 つのタイプに分けることができる[8]（図 8）。タイプ A の機能について杉山は、他のメソアメリカ文化を参照し[9]、生贄用ナイフであると解釈している[Sugiyama 2005:134]。タイプ B は、テオティワカンの図像においてしばしば登場し、ナイフに血の滴る心臓が刺さった様子が描かれている。しかし、ペリー[Parry 2002]によると、実際に出土したタイプ B は脆く、生贄用ナイフには適していないと指摘する。両端が尖る特徴を持つタイプ D とタイプ E は、その形態から、最も穿孔具としての機能を持つと思われる。MP 内の埋葬からの出土遺物に関しても、杉山の分類方法に従い筆者がタイプ分類を行った。

タイプ D とタイプ E は非常に形状が似ているため、また、杉山の分類は FSP 出土の遺物に対して付けられたものであるため、本分析において使用する遺物のタイプ分類については次のような指標をもうけた。完形で出土した遺物の全長に対する幅の広さの割合（L／W）を求め、数値が 6 以上であればタイプ D、6 未満であればタイプ E とした。この数値は、杉山が幅の広さによって分類したものを、筆者が全長の値も加え、その割合として求めたものである。MP 出土の遺物にも同様のタイプ分類を行うためである。

表１　両面調整ナイフ（各タイプの数字は完形品数を示す）

Grave	Total	Type A	Type D	Type E
FSP14	170	1	106	14
MP2	29	15	1	0
MP3	9	0	0	8
MP5	33	0	3	24
MP6	8	2	3	0

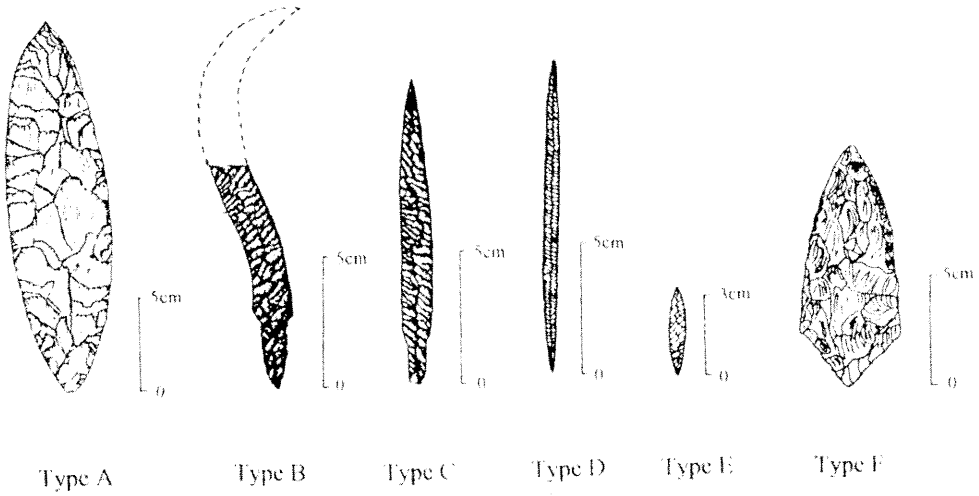


図８　「羽毛の生えた蛇神殿」出土の両面調整石器６タイプ

［Sugiyama 2005: 132 から引用］

(2) 石刃（表２）

墓から出土する黒曜石のうち最も多い器種は、石刃である[Parry 2002]。石刃は、それを得るために特別に加工された多面体の石核から剥ぎ取られた剥片であるが、側縁は非常に鋭利な刃を持つ特徴がある。また、その多くが尖った先端を持つ。両面調整ナイフは、二次調整により先端を尖らせているが、石刃は多くが剥ぎ取った段階で先が尖る[10)]。もう一つの特徴として、石刃には、その打面付近に抉り（えぐり）[11)]と呼ばれるくぼみが見られる場合が多い。多くはこの抉りを利用して、木製品などの柄を伴っていたという[Parry 2002, Schele and Miller 1986:73]。あるいは抉りに糸などを掛けて石刃を衣服の装飾として用いていたという[Parry 2002]。

3-2. その他の放血用穿孔具（「緑石」〈ヒスイ等〉、骨角器、植物のトゲなど）

メソアメリカ地域では、「緑石」が最も貴重な品、威信財の一つとして珍重された[12)]。テオティワカンのモニュメント内における調査では「緑石」製の副葬品は多数出土しているが、放血用穿孔具はこれまでの調査においては発見されることはなかった。ところが、2004 年度の「月のピラミッド：MP」埋葬 6 の発掘調査において、2 本の「緑石」製の針状製品が出土した。それらは、豪華な副葬品に包まれた埋葬体 6-A,6-B の肩の部分にそれぞれ突き刺さるようにして発見された。先

表 2　石刃（Point:先端が尖る、Notch:抉りを持つ、Point + Notch:先端が尖り抉りを持つ）

Grave	Total	Complete	Point		Notch		Point + Notch		No damage	
FSP 14	413	43	36	84%	27	63%	25	58%	10	23%
MP2	356	37	33	89%	33	89%	29	78%	0	0%
MP3	153	8	8	100%	8	100%	8	100%	0	0%
MP5	169	12	7	58%	0	0%	0	0%	1	8%
MP6	494	55	48	87%	55	100%	48	87%	0	0%

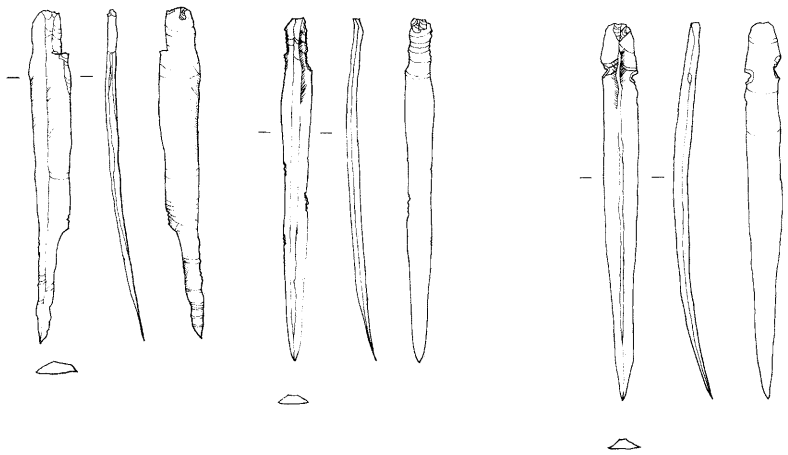
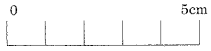


図 9　石刃　抉りのタイプ



端が尖り、双方とも全長は約 10 センチメートルで、針穴を持つ。メソアメリカの他地域において同様の針が発見された例は極めて少なく、絵文書や石彫などにも、「緑石」製の針が放血用穿孔具として描かれている明白な例はない。また放血儀礼は、主に舌や性器などから血を放つ事例が報告されているが、この針は肩の部分から刺さったままの状態で発見された。これらの「緑石」製針が、放血用穿孔具として使われたかどうかは明確ではないが、その形態から可能性が指摘できる。「緑石」がメソアメリカの社会において威信財であったこと、先突であること、突き刺さるように出土したことなども考慮に入れて、放血用穿孔具として議論する余地があると筆者は考える。

放血用穿孔具として使われた材質として、上述の黒曜石、「緑石」以外にも骨や植物のトゲ、アカエイの尾骨、サメの歯、動物の角などがメソアメリカの各地域で報告されている[Joyce 1991; Schele and Miller 1986]。テオティワカンでは、1998 年度の調査で発見された MP 埋葬 2 において、加工が認められる針のような骨角器が見つかっている。東の壁に寄りかかるように座り、腕を背後に回した埋葬体近くから発見された。マヤやオルメカの墓から出土した放血用穿孔具は、埋葬体の

骨盤付近から出土することがあるが[Joyce et.al. 1991; Schele and Miller 1986]、この骨角器はメソアメリカの他の地域における放血用穿孔具の出土状況と類似する。したがって、この MP 埋葬 2 から出土した骨角器は放血儀礼に関係している可能性が高いと筆者は考える。針の上部が欠落しているため、全体の形態は不明である。

次に、リュウゼツランのトゲが放血用穿孔具として解釈されている事例を示す。メキシコ中央高原において、リュウゼツランのさまざまな日用品としての使用は数千年前から始まったとされる[Parsons et.al. 1990:1]。放血用穿孔具として使われた可能性としては、都市の周辺に位置するアパートメント式住居複合から出土したと思われる壁画の事例があげられる。MP 東のトラクィラパシュコ（Tlacuilapaxco）の壁画（図 10）に、リュウゼツランのトゲと思われる図像が描かれており [C. Millon 1988; Taube 2000; Teresa 2001]、ラ・ベンティージャ（La Ventilla）の床面図像にもリュウゼツランのトゲと思われる類似の図像が描かれている [Cabrera 2001]。このことは、テオティワカンにとってリュウゼツランのトゲが何らかの象徴的な意味を持っていたことを示している。未だ研究者の間で意見の一致は見られないが、これらの図像は放血儀礼に関連していると解釈されている。

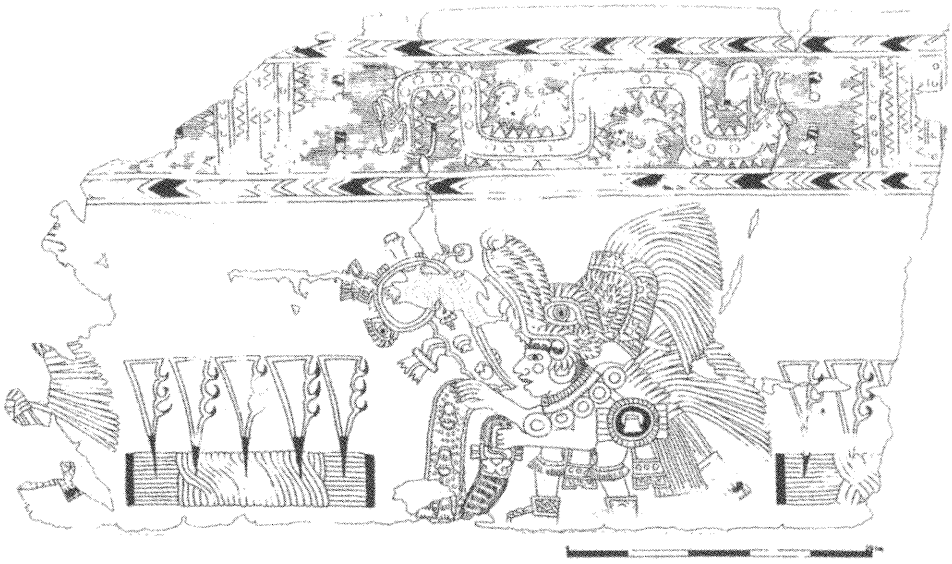


図 10　トラクィラパシュコの壁画［C. Millon 1988: 197 から引用］

実測図：杉山三郎

4. 分析

4-1. 黒曜石製品からみるテオティワカンにおける放血儀礼

ここでは、黒曜石製品の観察結果を分析する。具体的には黒曜石製品の形態、色、出土状況に注目し、各データの整理を行う。

形態

初めに、出土した黒曜石製品の形態的特徴に注目をする。黒曜石製品の全長の分布については

11,12,13,14 にまとめた。図 11 からは、同じ両面調整ナイフタイプ A においても非常に全長の開きが大きいことがわかる。ただし、全長 250 ミリメートルを超えるものは全て、「月のピラミッド：MP」埋葬 2 からの出土遺物である。出土状況から判断すると、これらのナイフは、MP 埋葬 2 の中心付近にあった放射状の副葬品を構成しているものであり、ペリー［Parry 2005 私信］の言うように、非常に大きく重いので、実用品というよりも副葬目的の象徴品である可能性が高い。

図 12 からは、「羽毛の生えた蛇神殿：FSP」埋葬 14 と MP 埋葬 5 から出土したタイプ D と、主に MP 埋葬 6 から出土したタイプ D との全長の差が読み取れる。全長 30 ミリメートルから 80 ミリメートルの短形と全長 110 ミリメートルから 180 ミリメートルの長形に分けられるが、その差が大きく、機能が異なる可能性が指摘できる。各埋葬による差は、短形は長形のミニチュア製品であるという解釈に加え、埋葬時期の製作基準や支配者の体制を反映しているとも解釈できる。

図 13 から読み取れるように、タイプ E の全長は 30 ミリメートルから 60 ミリメートルの間に集中していると言える。形状からタイプ A のミニチュア製品とも言えるが、全長の開きがそれほど見られないことから、サイズが規格化され生産がコントロールされていたと解釈できる。

図 14 から明らかなように、石刃の全長は、FSP 埋葬 14 以外においては 80 ミリメートルから 120 ミリメートルの間に集中していると言える。ただし、FSP 埋葬 14 の石刃は、長形と短形に二分布している。また、長形刃には、同じ石核から連続して作られ同一箇所で出土する製品が観察できる。そして、それらには使用痕はほとんど見られず、他の石刃には多く見られる抉りを伴わない[Parry 2001, 2002]。

抉りの分布は図 15 のようである。FSP 埋葬 14 と MP 埋葬 5 に比べて、MP 埋葬 2,3,6 は、ほとんどの石刃が抉りを持つ。傾向の差は、使用目的の相違も含め、埋葬が作られた様々な時期の黒曜石製品の製作基準の差を表しているといえる。

石刃の先端の形状に注目をし、図 16 にまとめた。各埋葬のほとんどの石刃の先端が尖っていることがわかる。MP 埋葬 5 は、抉りを持つものも少なかったが、先端が尖る石刃も他の埋葬に比べて少なかった。副葬された黒曜石製品の特徴以外に、MP 埋葬 5 と他の埋葬の違いはあるだろうか。埋葬体の多くは腕を背後で縛られたような状態で出土していたが、埋葬体 5-A,B,C は、胡坐をかいて手を足の上に乗せた状態で出土した。他の埋葬体と同様に手を縛られていたかどうかは明らかでない。MP 埋葬 5 が建設された時期に何らかの政治体制の変化が起こった可能性も指摘できる。

色

次に、黒曜石の色の分布については図 17,18 のようであった。黒曜石の色の使い分けは、各埋葬でほぼ一色に統一されている[Parry and Kabata 2004]。赤色が混じった黒曜石は住居址からはほとんど出土しないため、日用品として使われることは少なかったが[Parry and Kabata 2004]、MP 埋葬 2 から出土した両面調整ナイフには赤色が混じった黒曜石が多く使われていた。それらは、MP 埋葬 2 の中心部分に放射状に配置された副葬品を構成しているため、特別な宗教や政治目的のために作られ、テオティワカン国家に直接コントロールされた工房によって製作された可能性が指摘できるという[Carballo 2004; Parry and Kabata 2004]。

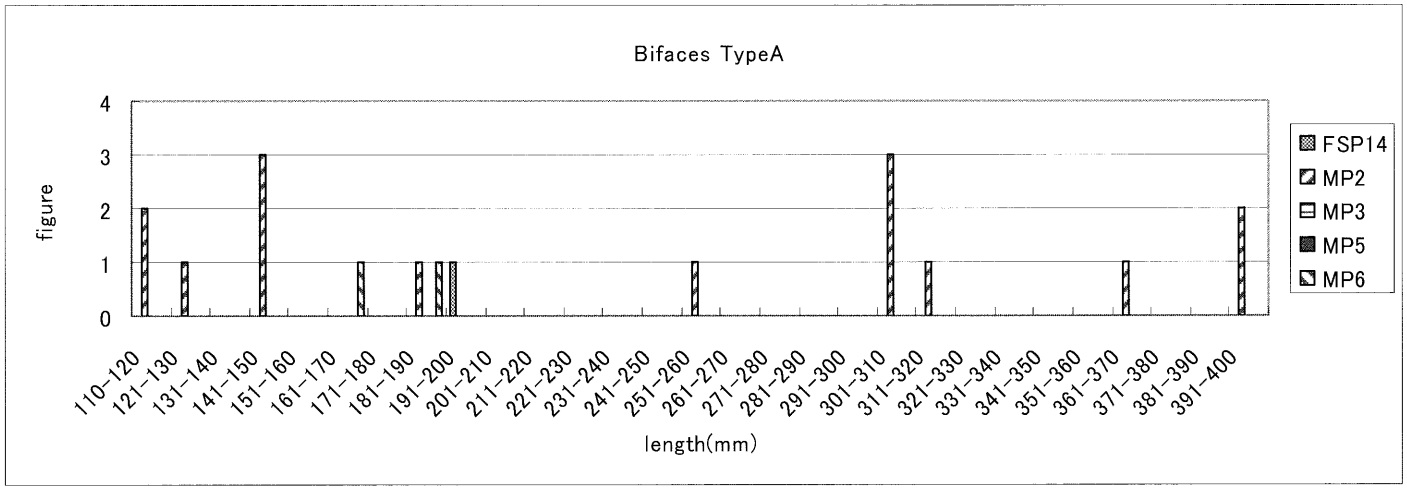


図 11　全長の分布

両面調整ナイフ タイプ A

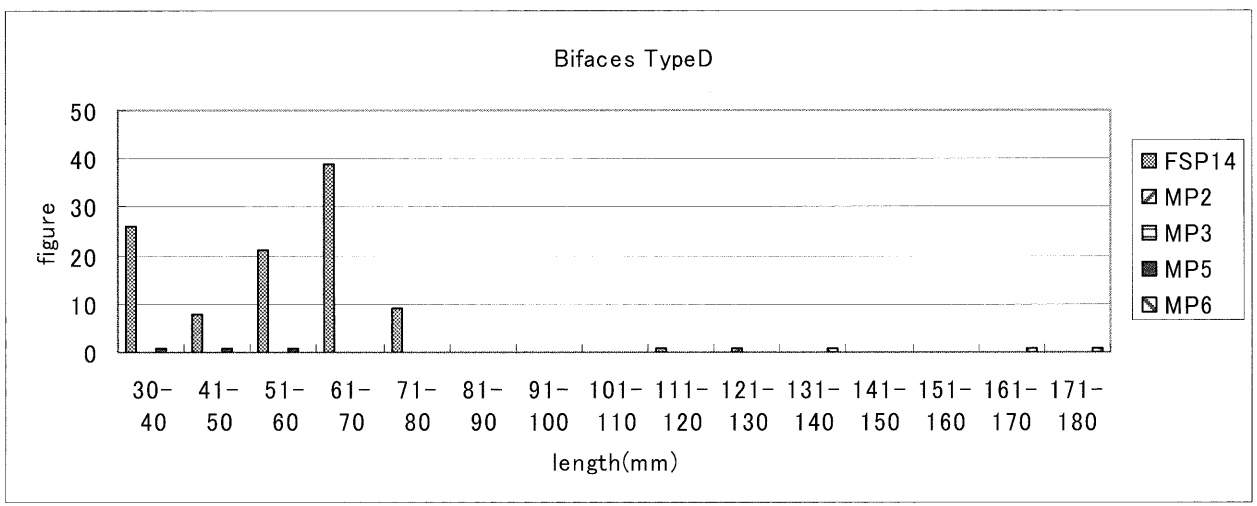


図 12　全長の分布

両面調整ナイフ タイプ D

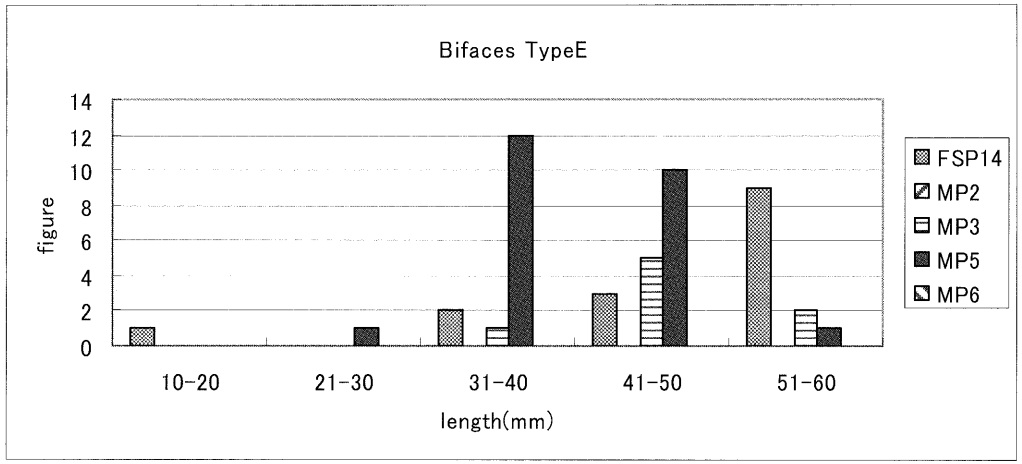


図 13 全長の分布

両面調整ナイフ タイプ E

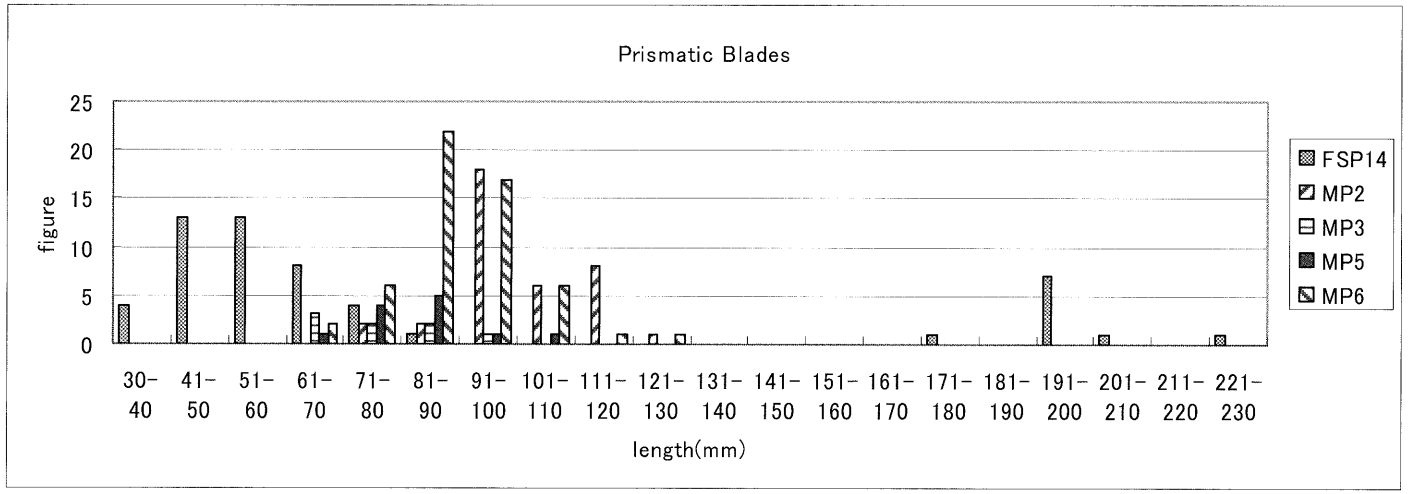


図 14 全長の分布

石刃

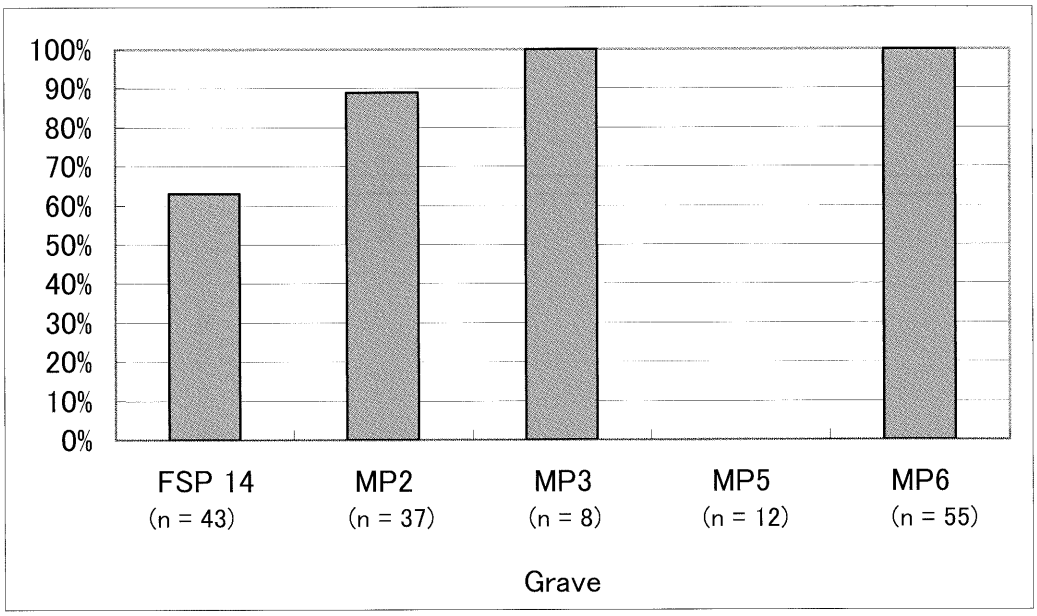


図 15　抉りを持つ石刃

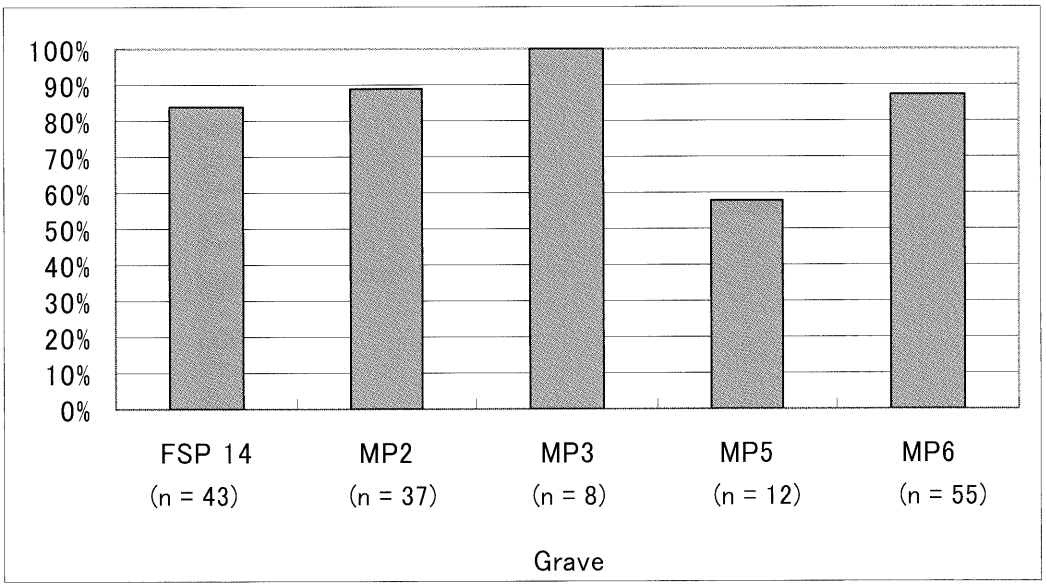


図 16　尖った先端を持つ石刃

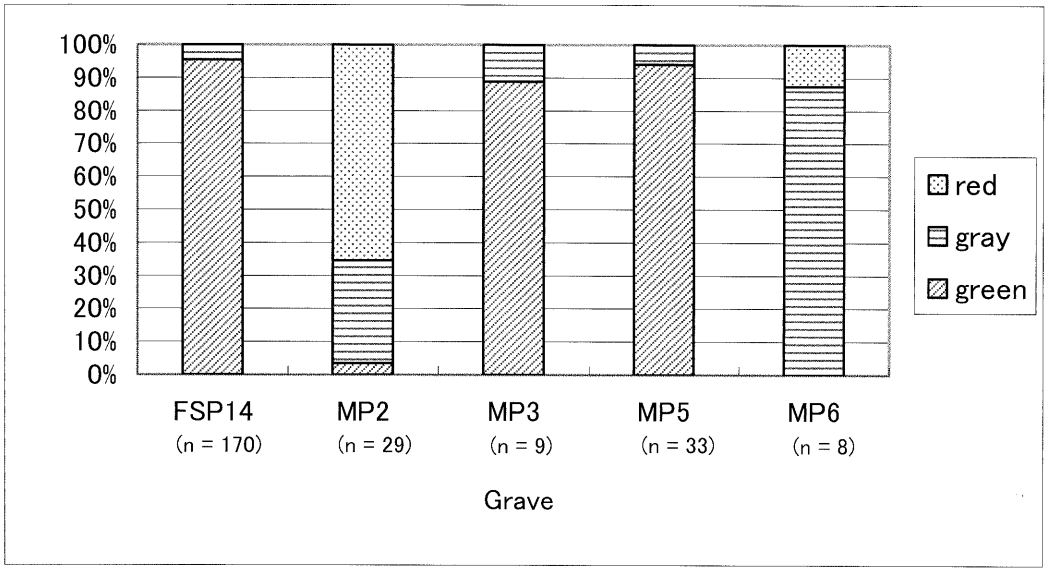


図 17　色の分布　両面調整ナイフ

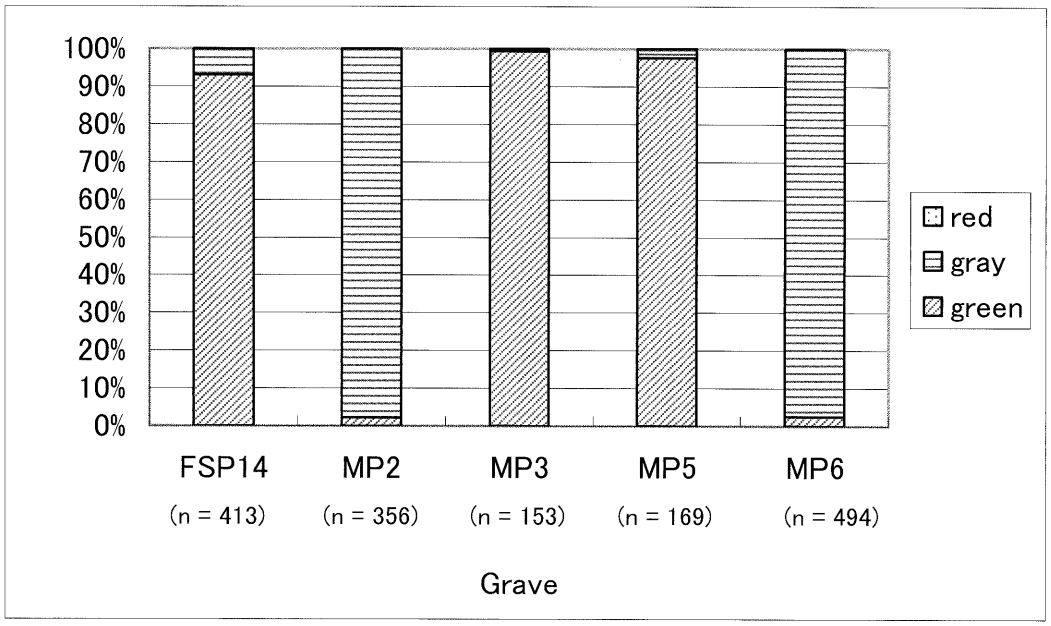


図 18　色の分布　石刃

出土状況

メソアメリカの放血儀礼において、埋葬体の骨盤付近から放血用穿孔具が出土する例が少なからずある。FSP 埋葬 14 では、20 体の埋葬体の中央付近に集中的に副葬品が出土していたが、特定の埋葬体との関連性は見られなかった。MP 内の各埋葬においては、骨盤付近から両面調整ナイフや石刃が多く出土したばかりでなく、埋葬の四隅などにある程度のまとまりを持って出土したり、石刃の先端の向きがそろっていたり、打面部分が一点に集中していたり、各埋葬にいずれかのあるいは複数の傾向が見られた。黒曜石製品の埋葬への配置の方法は無秩序ではなく明らかに何らかの規則に基づいている。

骨盤付近に放血用穿孔具を伴うメソアメリカの他の地域の埋葬体と、骨盤付近に黒曜石製品を伴うテオティワカンの埋葬体との相違点はあるだろうか。大きな違いは、本研究にて扱ったテオティワカンの多くの埋葬体は手を背後で縛られて埋葬されているということである。つまり、埋葬体は生贄体である可能性が強い。生贄埋葬体に放血用穿孔具が伴って発見された例はメソアメリカの各地域においても報告されていない。しかし、一連の儀礼場面が描かれた古典期の遺跡ボナンパック（Bonampak）の壁画において、支配者の放血儀礼に伴い、生贄とされる捕虜らも放血を行う場面が見られる[Schele 1984:14]。生贄として殺される前に、捕虜たちも儀礼的な放血を命じられていたという。生贄埋葬体に放血用と思われる黒曜石製品が伴っているのは、テオティワカンの支配者の権力を顕示する一方法なのかもしれない。そして、埋葬儀礼が一般民衆の面前で行われたのならば、支配者の権力を示すための効果的な方法であった可能性も指摘できよう。

4-2. その他の穿孔具からみるテオティワカンにおける放血儀礼

「緑石」製の針を伴っていた MP 埋葬体 6-A,6-B の 2 体は、他の埋葬体とは異なり、豪華な副葬品を身につけていた。埋葬 6 内の 12 体の埋葬体はすべて手を背後に縛られた状態で出土し、10 体は頭部が欠落していた。頭部の欠落していた 10 体は、埋葬の北部に集中して埋葬されてはいたが、重なり合う埋葬体もあり、姿勢に秩序はない。副葬品を全く伴っていない 10 体とは異なり、埋葬体 6-A,6-B は、「緑石」や貝、黒曜石で作られた豪華な副葬品を伴っていた。このことから、他の 10 体よりも地位が高い人物であった可能性が高い。埋葬体 6-A,6-B の肩付近から出土した「緑石」製針には針穴が認められるため、刺繍針として使用する可能性や、装飾品として衣服や頭飾りに結び付けていた可能性も指摘できる。しかし、埋葬体 6-A は右肩、埋葬体 6-B は左肩にそれぞれ突き刺さるように発見されていることから、刺繍針や装飾品とは考えにくい。他のメソアメリカ地域では、肩の部分から放血する事例は報告されていないが、先スペイン期の絵文書資料（図 19）によると、身体のあらゆる部分から放血する場面も見られることから、これらの「緑石」製針が放血用穿孔具である可能性は否定できないと筆者は考える。いずれにしても、テオティワカン周辺には威信財として考えられている「緑石」の産地がないことや、「緑石」が精巧な加工を施され副葬品として埋葬体に伴っていたことを考慮すると、テオティワカンの支配者層の存在と他地域との交易が示唆できる。

埋葬 2 にて発見された骨角器は、出土状況からは埋葬体が身につけていたのかは判断しかねるが、先端が鋭く尖るように加工がされていたために、何らかの用途に使われる針であった可能性がある。遺物の一部が欠落しているため、針穴などの状態は分からないが、刺繍針や装飾品、その他

の道具としての用途ということも考えられる。しかし、放血用骨角器がメソアメリカの各地で埋葬体の骨盤付近に伴って発見されていることから、埋葬2の骨角器は、放血用穿孔具と解釈することは可能である。この埋葬体は、「緑石」製の装飾品を身に着けていたことから、高位の人物の可能性があるが、両手は後ろに回されており生贄にされた可能性が高い。テオティワカンのモニュメント内の埋葬において発見された骨角器は一点であり、リュウゼツランのトゲも考古資料としては発見されていない。「緑石」製針と同様、テオティワカンにおける骨角器やリュウゼツランのトゲについてもさらなる議論が必要である。

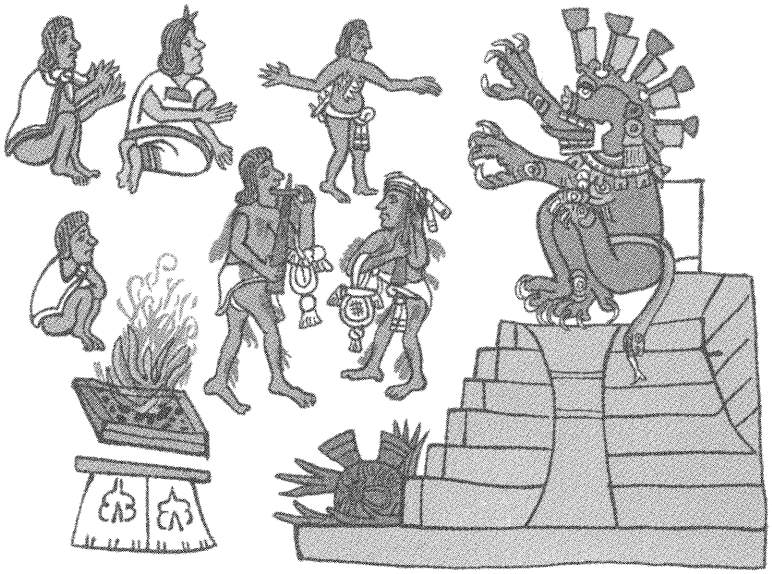


図19　絵文書［Codex Nuttall　1975 から引用］

5. 考察

5-1. 実用品と象徴品について

本章は、分析結果に基づきテオティワカンの放血儀礼について考察する。最初に、分析した放血用穿孔具と思われる黒曜石製品が実用品なのか象徴品なのか、という内容について検討したい。

本研究にて分析対象としたテオティワカンの埋葬には非常に多くの黒曜石製穿孔具が出土していた。実用品としては埋葬体に対しての資料数があまりにも多いこと、特定の個人に伴う穿孔具以外にも、ある一定の地域に集中してセットで出土していることなどから、出土した穿孔具の一部は実際に血を放つ目的というよりもむしろ、象徴品として認識されていた可能性が指摘できる。装飾品や武器であった可能性、またはそれらと穿孔具という両方の機能を兼ね備えていた可能性も指摘できるが、いずれにしても、放血用穿孔具は、埋葬儀礼の象徴的な構成要素であったと考えられる。

5-2. 放血用穿孔具の生産コントロールと支配者

分析の結果、出土した黒曜石製品の全長のサイズ、抉りの有無や先端の状況、色などの特徴は、

各埋葬において規格化されているという特徴が見られた。このことから、各埋葬儀礼に関わったテオティワカンの支配者層が、威信財であり象徴品であった放血用穿孔具の生産をコントロールしていたと考えられる。規格化するということは、特別な製品の生産が求められていた、と言えよう[Sinopoli 1988: 582]。

テオティワカンもメソアメリカの様々な地域と同様、支配者の権力を表す埋葬という場に、支配イデオロギーが物質化したと思われる穿孔具を埋葬していた[DeMarrais et.al. 1996]。もしオルメカやマヤの事例と同様にテオティワカンにおける放血儀礼も、支配者層の権力を高めるために行われていたならば、生贄埋葬体に伴って放血用穿孔具を副葬することが、テオティワカンの支配者層にとって権力を高める方法であったといえる。黒曜石製品などの製作技術が支配者の権力や威信の向上や維持に関わっていたと言えるだろう[Helms 1993; Inomata 2001:333]。

テオティワカンの放血儀礼の存在がより明らかになることで、テオティワカンの王族や貴族階級の権力はどのように示され、社会にどう機能するのか、ということを検討することができる。また、テオティワカンの政治イデオロギーが明らかになれば、交流のあったメソアメリカの各地域へどのように影響を与えていたのかを検討することにつながるとも言えよう。

6. 結びに

筆者は、関連する考古資料を形態的に分析し、その傾向を引き出すことで、テオティワカンには、少なくとも概念としての放血儀礼が存在した可能性を高めることができたと考える。しかし今回は、ピラミッド建設時期のデータに基づいた分析を行い、壁画が主に描かれるようになる後の時代における図像とこれらの考古資料との関係についてはほとんど触れなかった。放血儀礼に関係があると考えられている図像の研究と考古遺物との関連を分析することが今後の研究課題となろう。ジョイス[Joyce 1991:8]は、マヤの放血儀礼の表現方法は幻覚や放血など場面描写が主であるが、オルメカのそれは抽象的な記号、あるいは放血用穿孔具を図像として表すものが多いという。テオティワカンは、石彫や壁画において写実的な図像を残さなかったが、それは放血儀礼の証拠を残していないということなのだろうか。メソアメリカの図像研究はこれまでに様々な解釈が提出されている。テオティワカンも例に漏れず、写実的ではないが、放血儀礼の様子を何らかの形で媒体に表象し、証拠を残していたかもしれない。

また、本研究も含めて、これまでの放血儀礼研究は王族や貴族階級についてのものが主である。その点で、民衆の生活習慣を実際に目の当たりにした事実を述べる年代記は貴重な資料と言える。支配者の放血儀礼は権力に関連しているが、民衆の間にも放血儀礼があったとすれば、それは異なる目的で行われていたといえよう。本研究では、支配階級と関連すると思われるデータを使用したが、テオティワカンでは、アパートメント式住居複合においても今回分析した放血用穿孔具に類似した道具が出土している。これらの解釈を、王族や貴族階級のデータ、図像資料、エスノヒストリー資料などと比較して行うことにより、テオティワカンにおける権力関係の議論も可能になるだろう。さらに、メソアメリカの各地域の事例と比較することで、メソアメリカ社会の多様性、共通性の議論につながる。この点について論じるには、さらなる資料の蓄積、比較研究が必要となる。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、指導教官の杉山三郎教授をはじめ、愛知県立大学の稲村哲也教授、アリゾナ州立大学大学院の村上達也氏、メキシコ国立自治大学大学院の嘉幡茂氏、古手川博一氏から貴重なアドバイスを頂戴した。また、現地での分析作業は愛知県立大学大学院の佐藤朋恵氏に協力していただいた。この場を借りて、各位に御礼申し上げる。

註

1) 「緑石」には、ヒスイの他、蛇紋岩なども含まれる。
2) クラーク[Clark 1986]は、テオティワカンには黒曜石製品の工房が多数あったというスペンスの解釈に異議をとなえており、黒曜石製品の生産活動はあったが、国家内の生産はスペンスの見積もりほど多くはなかったとしている。
3) メキシコ盆地には、黒曜石製品が多く見られ、石刃や槍先などは、古典期、後古典期を通して住居の廃棄物の中にも広く見られる[Parry 2002]。
4) 動物の皮を剥いだり、物を切ったりするのに用いられていた。
5) メソアメリカの各地域で報告されている放血用穿孔具は、リュウゼツランのトゲ、アカエイの尾骨、ヒスイ製針、そして石刃などであった。これらは縦に長く幅が狭いという共通の形態的特徴を持つ。
6) メソアメリカ地域では、黒曜石はヒスイとともに威信財として考えられていたが、黒曜石の石自体には象徴的な意味はなく、加工後、黒曜石の色や輝き、ナイフとしての機能などが傑出した時に象徴的な意味が生じるという[Parry 2002]。しかし、テオティワカンは黒曜石の産地が近くにあることで、日常的な道具としても黒曜石製品が大量に使われていた。
7) 両面調整石器のうち、分析対象としたのはナイフ型石器に限るため、以後、両面調整ナイフと記述する。
8) サラビア[Sarabia 1998]は、7 つのタイプに分類している。本研究では、限られた器種に焦点を当てるため、それらの限定された器種の形態上の違いを明確に示す杉山の分類に従う。サラビアのデータを基にしたが、その際、サラビアの分類方法を杉山の分類法に変更してある。また、損傷が激しく判別できない場合はタイプ付けをしなかった。
9) アステカでは同タイプのナイフを心臓を取り出すために使っていたが、テオティワカンの図像においてはナイフの使用が認められない。また、エル・タヒン遺跡の球戯場にあるパネル 4 にもタイプ A のナイフを使った生贄儀礼の場面が見られる[Pascual 2001]。
10) 中には、剥ぎ取った後に手を加え、先を尖らせているものも見られる。
11) 多くは両側に一つずつ見られるが、今回の筆者の調査において、抉りにもタイプがあるのではないかという考えが生まれた。あるものは抉りが片側のみに二箇所見られ、あるものは両側に複数見られる。また、全く加工法が異なると思われる抉りも見られた（図 9)。しかし、本研究においては、研究の主題と直接の関係がないと考えられるので、抉りのタイプ分類については考察しなかった。
12) 村上[Murakami 2004]による、テオティワカンのモニュメント内における「緑石」についての研究は、「緑石」製品の素材やサイズの違いがそれらを所有する者の地位の差をも象徴してい

た可能性を指摘している。

参考文献

Barba L, L. Lazos, K. Link, A. Ortiz, and L. López

1998 Arqueometría en la Casa de las Águilas. *Arqueología Mexicana*, VI 31, pp.20-27. Mexico, D.F.

Berlo, J. C.

1989 Early Writing in Central Mexico: In Tlilli, In Tlapalli before A.D. 1000. *Mesoamerica After the Decline of Teotihuacan A.D. 700-900*, edited by R. Diehl and J. C. Berlo, pp.19-47, Dumbarton Oaks, Washington, D.C.

Brady, J. and A. Stone

1986 Naj Tunich: Entrance to the Maya Underworld. *Archaeology* 39 (6): 18-25.

Cabrera C., R.

2001 Caracteres Glífos Teotihuacanos en un Piso de La Ventilla. *La Pintura Mural Prehispánica en México, Teotihuacán*, edited by B. de la Fuente. vol. 1, tomo 2, pp. 400-427. Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Cabrera C., R., S. Sugiyama, and G. L. Cowgill

1991 The Templo de Quetzalcoatl Project at Teotihuacan: A Preliminary Report, *Ancient Mesoamerica* 2 (1): 77-92.

Carballo, D.

2004 Militarism, Early State Expansion, and Obsidian Specialization at Teotihuacan. Paper Presented at the 69th Annual SAA Meeting.

Clark, J. E.

1986 From Mountains to Molhills: a Critical Review of Teotihuacan's Obsidian Industry. *Research in Economic Anthropology*, edited by B. L. Issac, Supplement 2, pp. 23-74, JAI Press, Greenwich.

Codex Nuttall

1975 A Picture Manuscript from Ancient Mexico, edited by Zelia Nuttall. Dover Publications, New York.

Colas, P., P. Reeder, and J. Webster

2000 The Ritual Use of a Cave on the Northern Vaca Plateau, Belize, Central America. *Journal of Cave and Karst Studies* 62 (1): 3-10.

Davletshin, A.

2003 Glyph for Stingray Spine. *Mesoweb:* <www.mesoweb.com/features/davletshin/Spine.pdf>.

DeMarrais, E., L. J. Castillo, and T. Earle

1996 Ideology, Materialization, and Power Strategies. *Current Anthropology* 37 (1): 15-31.

Evans, S. T, and J. C. Berlo

1992 Teotihuacan: An Introduction. *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan. A Simposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October, 1988*, edited by J. C. Berlo, pp. 1-26. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.

Gamio, M.

1922 *La Población del Valle de Teotihuacán,* 3 vols. Mexico, D.F., Secretaría de Agricultura y Fomento.Repr. 1979, 5 vols. Instituto Nacional Indigenista, Mexico, D.F.

Helms, Mary W.

1993 *Craft and the Kingly Ideal: Art, Trade, and Power.* University of Texas Press, Austin.

Inomata, T.

2001 The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society. *Current Anthropology* Vol. 42 (3): 321-350.

Joyce, R., R. Edging, K. Lorenz, and S. Gillespie

1991 *Olmec Bloodletting: An Iconographic Study. Sixth Palenque Round Table, 1986*, edited by V. Fields. Electronic version. University of Oklahoma Press, Norman.

Lombardo de Ruiz, S

2001 El Estilo Teotihuacano en la Pintura Mural. *La Pintura Mural Prehispánica en México, Teotihuacán*, edited by B. de la Fuente, vol. 1, tomo 2, pp. 3-64. Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Manzanilla, L., M. Millones, and M. Civera

1999 Los Entierros de Oztoyahualco 15B: N6W3. *Prácticas funerarias en la Ciudad de los Dioses*, edited by L. Manzanilla and C. Serrano. pp. 247-283. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Millon, C.

1973 Painting, Writing, and Polity in Teotihuacan, Mexico. *American Antiquity* 38 (3): 294-314.

1988 Maguey Blood Letting Ritual. *Feathered Serpents and Flowering Trees,* edited by K. Berrin. pp.194-205. Fine Arts Museums of San Francisco, San Francisco.

Millon, R.

1973 *Urbanization at Teotihuacán, México, vol. 1, pt. 1: The Teotihuacan Map: Text*. University of Texas Press, Austin.

1988 Where Do They All Come From? The Provenance of the Wagner Murals from Teotihuacan. *Fethered Serpents and Flowering Trees: Reconstructing the Murals of Teotihuacan,* edited by K. Berrin, pp. 78-113. Fine Arts Museums of San Francisco, San Francisco.

Murakami, T.

2004 Technological and Ideological Dimensions of Craft Production: A Preliminary Analysis of Green Stone Material from the Moon Pyramid Complex, Teotihuacan. Paper Presented at the 69th Annual SAA Meeting.

Parry, W. J.

2001 Obsidian Artifacts from the Moon Pyramid, Teotihuacan: Offerings and Domestic Debris. Paper Presented at the 66th Annual SAA Meeting.

2002 Nonutilitarian Aspects of Obsidian Use in the Basin of Mexico. Paper Presented at the 67th Annual SAA Meeting.

Parry, W. J. and S. Kabata

2004 Chronology of Obsidian Artifacts From the Moon Pyramid, Teotihuacan, Mexico. Paper presented at the 69th Annual SAA Meeting.

Parsons, J., and M. L. Parsons

1990 *Maguey Utilization in Highland Central Mexico: An Archaeological Ethnography.* Anthropological Papers. Museum of Anthropology, University of Michigan, No 82.

Pascual, A.

2001 Teotihuacán: Los Sustentos Materiales de la Comunicación (Fases Tzacualli y Miccaotli). *La Pintura Mural Prehispánica en México, Teotihuacán*, edited by B. de la Fuente, vol. 1, tomo 2, pp. 291-324. Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Pastrana, A.

1998 *La Exploración Azteca de la Obsidiana en la Sierra de las Navajas*. Colección Científica, núm.383, Insutituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

Sarabia, A.

1998 Litica Tallada de la Piramide de las Serpientes Emplumadas. Proyecto Templo de Quetzalcoatl, Manuscript in San Juan Teotihuacan Research Center.

Schele, L.

1984 Human Sacrifice Among the Classic Maya. *Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica*, edited by E. H. Boone. pp. 7-48. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Schele, L., and M. Miller

1986 *The Blood of Kings: Dynasty and Ritual in Maya Art*. Kimbell Art Museum, New York.

Sempowski, M., and M. W. Spence

1994 *Mortuary Practices and Skeletal Remains at Teotihuacan*. University of Utah Press, Salt Lake City.

Sinopoli, Carla M.

1988 The Organization of Craft Production at Vijayanagara, south India. *American Anthropologist* 90: 580-597.

Spence, M. W.

1981 Obsidian Production and the State in Teotihuacan. *American Antiquity* 46 (4): 769-788.

1983 Craft Production and Polity in Early Teotihuacan. *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by K. G. Hirth. pp. 87-114, Albuquerque. University of New Mexico Press, New Mexico.

Storey, R., and R. Widmer

1999 The Burials of Tlajinga 33. *Prácticas funerarias en la Ciudad de los Dioses*, edited by L. Manzanilla and C. Serrano. pp. 203-218. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Sugiyama, S

1992 Rulership, Warfare, and Human Sacrifice at the Ciudadela: An Iconographic Study of Feathered Serpent Representations. *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan. A Simposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October, 1988*, edited by J. C. Berlo, pp. 205-230. Dumbarton Oaks Research

Library and Collection, Washington D.C.

2004 Governance and Polity at Classic Teotihuacan. *Mesoamerican Archaeology Theory and Practice*, edited by J. A. Hendon and R. A. Joyce ed. Blackwell, Malden, MA.

2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership. Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan.* Cambridge University Press, Cambridge.

Sugiyama, S., and R. Cabrera C.

1999 *Informe Técnico de las Excavaciones en la Pirámide de la Luna, Teotihuacán: Primera Temporada Junio/1998-Marzo/1999.* 2 vols. Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

2000 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en la Pirámide de la Luna, Teotihuacán: Segunda Temporada (1999) de Excavaciones.* 2 vols. Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

2003 *Informe de la Cuarta Temporada 2002, del Proyecto Pirámide de la Luna y Proyecto de Investigación en la Pirámide de la Luna, Teotihuacán: Sexta Temporada de Excavación 2003.* Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

2005 *Informe del Proyecto Pirámide de la Luna, Teotihuacan: Propuesta de la Septima Temporada de Excavación 2004.* Archivo del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

Sugiyama, S., and L. López L. (editors)

2006a *Sacrificios de consagración en la Pirámide de la Luna.* CONACULTA-INAH/Arizona State University, Mexico, D.F.

2006b Dedicatory Burial/Offering Complexes at the Moon Pyramid, Teotihuacan: A Preliminary Report of 1998–2004 Explorations. *Ancient Mesoamerica,* Cambridge University Press (in press).

Taube, K. A.

2000 The Writing System of Ancient Teotihuacan. *Ancient America.* vol. 1: 1-56. Center for Ancient American Studies, Barnardsville and Washington, D.C.

Teresa, M.

2001 De Teotihuacanos, Mexicas, Sacrificios y Estrellas. *La Pintura Mural Prehispánica en México, Teotihuacán*, edited by B. de la Fuente. vol. 1, tomo 2, pp. 391-399. Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico, D.F.

Wilkerson, S. J. K.

1984 In Search of the Mountain of Foam: Human Sacrifice in Eastern Mesoamerica. *Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica*, edited by E. H. Boone. pp. 101-132. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

The Study of Bloodletting in Teotihuacan, Mexico: An Analysis of Archaeological Materials.

Yuko Ono

Key words: Teotihuacan, bloodletting, obsidian products, perforators, elite, ideology

Past research including archaeological and iconographic studies has suggested that bloodletting was conducted throughout Mesoamerica in various periods and that bloodletting conducted by ruling elites was important to legitimate their power. However, there is no clear evidence regarding whether bloodletting was conducted also in Teotihuacan, which was the most powerful and influential state in the Early Classic period. Furthermore, there is no consensus among researchers about how ruling elites in Teotihuacan legitimated their power. I examine whether ruling elites of Teotihuacan conducted bloodletting and, if so, whether they regarded bloodletting as a component of rituals that legitimated their power as seen in other societies in Mesoamerica.

In order to pursue my research objectives, I conducted an analysis of obsidian bifacial knives and prismatic blades uncovered from sacrificial burials at the Feathered Serpent Pyramid and the Pyramid of the Moon in the central part of the city. In other areas of Mesoamerica, ruling elites used obsidian prismatic blades with sharp edge or other tools that taper to a sharp point for bloodletting. Obsidian bifacial knives and prismatic blades that I observed are similar in their form to bloodletting tools from other areas of Mesoamerica. Thus, obsidian bifacial knives and prismatic blades are the most probable candidate for bloodletting tools. I call these tools *perforators* hereafter.

I examined the depositional context, form, dimension, and color of each perforator at each burial. In total 1837 perforators from 5 burials were examined. The observation of the depositional context shows that some of the perforators were placed near the pelvic region of interred victims. In other areas of Mesoamerica, some researchers suggest that perforators uncovered in a similar context were actually used for bloodletting. The perforators uncovered in Teotihuacan might have been used actually for bloodletting. Some other perforators in this analysis, however, were placed at the corners or other parts of the burials. It does not seem that these perforators were used for bloodletting. These perforators might have been placed there as symbolic items that represent bloodletting. The examination of the form, dimension, and color of perforators suggests that these tools are standardized at each burial. Sugiyama [2005: 122] indicates that the offerings associated with the burials at the Feathered Serpent Pyramid and the Pyramid of the Moon are exceptionally rich in quality compared to any other offerings found to date in Teotihuacan. The standardization and richness of obsidian perforators suggest political control of the production of them.

On the whole, there is a possibility that bloodletting tools existed in Teotihuacan and bloodletting might have been actually conducted at least as a part of burial rituals. The probable bloodletting tools and those of other areas of Mesoamerica are similar in their form and were excavated from a similar context, that is, burials. Although we do not have data regarding who conducted bloodletting along with burial rituals in Teotihuacan, ruling elites might have regarded bloodletting as a component of rituals that demonstrated their legitimacy as seen in other areas of Mesoamerica. I also note a difference in the general context of perforators between Teotihuacan and other areas of Mesoamerica. The perforators I examined were uncovered from sacrificial burials while the perforators of other Mesoamerican areas were uncovered from burials of ruling elites. This implies that the way ruling elites legitimate their power is different between Teotihuacan and other areas of Mesoamerica although we do not have evidence for the burials of ruling elites in Teotihuacan. Further research may reveal that the burials of ruling elites in Teotihuacan include some perforators as seen in other areas of Mesoamerica.

In other Mesoamerican areas, researchers have studied bloodletting based on archaeological, iconographic, mythological, and ethnographic data. They have utilized different kinds of data complementarily and presented persuasive interpretations about bloodletting. In contrast, previous bloodletting studies in Teotihuacan have been based almost exclusively on iconographic data and I utilized only archaeological data particularly focusing on bloodletting tools. In the future bloodletting studies in Teotihuacan it is necessary to adopt various approaches in order to better understand how ruling elites in Teotihuacan legitimated their power.

原稿受領日　2006 年 06 月 02 日
採択決定日　2006 年 10 月 04 日